29

現代日本文学館

29

小林秀雄 編集

文藝春秋

現代日本文学館 29
井伏鱒二

昭和四十二年十一月一日第一刷

著者　井伏鱒二
発行者　上林吾郎
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話東京(二六五)一二一一
振替東京七八七四三

印刷　凸版印刷
製本　凸版製本
定価　四八〇円

Printed in Japan　本全集の本文は現代表記にいたしました

目次

井伏鱒二伝　安岡章太郎　3
駅前旅館　29
鯉　126
山椒魚　130
屋根の上のサワン　135
背の高い椅子の誘惑　140
丹下氏邸　150
仕事部屋　161
さざなみ軍記　247
ジョン万次郎漂流記　318

白毛 368
遙拝隊長 378
丑寅爺さん 397
かきつばた 412
白鳥の歌 426

注解 436
解説 457
年譜 466
挿画 吉岡堅二「駅前旅館」
寺島紫明「背の高い椅子の誘惑」「かきつばた」
硲伊之助「仕事部屋」
小野竹喬「さざなみ軍記」
福王寺法林「ジョン万次郎漂流記」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

井伏鱒二伝

安岡章太郎

I

《私にはこういう気持がある。早く田舎へ帰りたいと思う半面に、最後まで東京に執着していたいと思う気持がある》（「二月九日所感」昭和十二年）

井伏鱒二全集の随筆をあつめた一巻を、手当り次第にひらくと、こんな書き出しが目についた。早く田舎へ帰りたいと思う半面、最後まで東京に執着していたい、何か面白くないことが起こるたびに、こんな気持になるという、――これは漱石の「三四郎」以来、笈を負うて東京へ出て来た学生に共通した心情であろう。いや何も田舎から出て来た学生だけには限るまい。げんに私自身、二日酔の朝、厠の中などで、「ああ田舎へかえりたい」ふと、そんなことをつぶやいたりすることがある。ただ私には帰るべき田舎は、現実には存在していないというまでだ。

漱石が、熊本から出て来た大学生の三四郎におこなった感情移入の源は、主としてロンドン留学時代の体験からだろうが、いまアメリカやヨーロッパの各地に散らばっている日本人留学生の心境も、大方はこれに似たものがあるだろう。いや異境は何も外国にだけあるのではなく、三四郎にとっては東京という都会が異境であり、現代にいたってはもはや日本という国の全体が東京と同様、異境になりつつあるともいえる。「学モシナラズンバ」という悲愴な決意は持たなくとも、知らず識らず私たちは揃ってストレイ・シープにはなっている。

あれは私が芥川賞をもらって間もなくのことだから、昭和二十八年、いまから十何年も前のことだが、はじめて井伏さんにお目にかかり、清水町のお宅でお酒を御馳走になったとき、何かのはずみで、

「結婚の相手は、どんな女性を選ぶべきでしょうか」

とうかがうと、井伏さんは盃を置いて、

「さアね、ぼくなら故郷の町を持っているひとが好いと思うね」

とこたえられた。あるいは「故郷に家のあるひと」であったかもしれない。どっちにしても私は、この言葉から即座に現在自分が女房にしている女のことを憶い浮かべ、はたして彼女には故郷といえるようなものが、あるかどうかと疑った。そして一種不安な、やるせない気持に陥ち入った。すると井伏さんは、また追い駈けるようにして、

「といっても、いまどき田舎の町が焼けずに残っているということは、めずらしいだろうがね」

とも言われた。そして話は、猫にマタタビを嗅がせると、どんな症状をていするものかというようなことに移って行った。――そのころ井伏さんはガラス瓶の中に青いマタタビの実をたくわえて、酒のさかなに用いておられたのだが、井伏さんがマタタビに慕いよる猫の真似をされると、顔つきから手つきまですっかり猫のようになってしまうのである。そして私が、その苦味のある青い実を嚙んでいると、

「あ、君は独身だったね。これはウッカリしていた。こんなものをすすめるんじゃなかった。こんばん君が猫のようになったら、こりゃ大変だ」

とガラス瓶をかかえて、さも大切そうに押入れの中へしまいこみ、「君が猫的にならないうちに、そのへんを散歩しよう」と阿佐ケ谷駅の近所の飲み屋へ案内に立たれた。

井伏邸をたずねる人は大抵、このようにして数刻の雑談ののちに、阿佐ケ谷、荻窪近辺の、つまり井伏氏の縄張りの店へ、散歩に連れ出されるもののようだ。それも故郷の話から、いきなりマタタビに転じても何の不合理も感じさせないような、じつに自然な態度で誘い出される。紺足袋に下ろしたての下駄をつっかけて、小刻みに迅速に歩く井伏さんのあとを、私は一種の夢見心地でついて行った。

西多摩の秋川にて（昭和39年）

「このへん、僕が引っこして来たころは、まだ一面、麦畑でね。飲み食いする店は一軒もなかったから、定期を買って毎日、新宿まで食事しに行ったものだ。あ、太宰が鎌瀧にいたころは、もうそんなことはなかったね。太宰は勤勉な男でね、下宿の晩飯で毎晩、おむすびをこさえてね、徹夜で仕事するときの食糧にしたもんだ。ほんとにあれは勉強家だったね。いつ行って見ても原稿用紙に向かっていて、僕の顔をみると、あわてて万年筆を置いて、書きかけの原稿をしまいこむ、そんなだったね、あの男は……。うん、このへんの人は、みんな麹町に住みたがってたものさ。永住する気ははじめからない。僕だってそうさ。畑をやっていた百姓に、道ばたでイキナリ、家を建てたいから土地を貸してくれ、そう言うと即座にいまいる土地が借りられたよ。しかし家を建てはじめたら中途で大工に金を持ち逃げされた。それで兄貴に、もう一度、金を送れと言ってやったら、兄貴は断わってきた。おまえの芸者買いの尻拭いなんかイヤだと言って、ね」

歩きながらの井伏さんの話は、こんな具合に前後左右に曲がりくねり、拡がったかと思うと、また急に狭くなる。時代も自由自在に遡っては、また突然立ち止まり、いつの間にかそれが現代の話に戻るといった具合なのである。私は、立ち並ぶ人家の暗い軒とネズミ色の夜空を仰ぎながら、茫漠として、何処を歩いているのか、何を話されているのか、しばしば判別に戸惑わざるを得なかった。ただ、

わかるのは井伏さんが、この町を決して定住の場所と考えてはおられないこと、にもかかわらず生涯の半分以上をこの土地に過ごされて、この町のウツロイやすさそのものに並々ならぬ愛着を持っておられることだ。それは駅前の飲み屋での井伏さんの飲みっぷりからも、容易に察しがつく。「おい、エスカルゴ」と、井伏さんは店の屋号でロイド眼鏡のマダムに呼び掛けながら、「お客さんにビール、僕にはお酒だ。あ、エスカルゴ、また君はメガネをとりかえたな。君のことを、何でもしょっちゅう、とりかえたがる女だと、青柳が言ってたぞ」

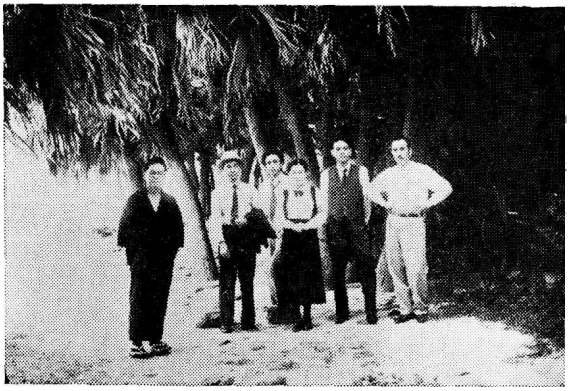
井伏さんはモジリの袖口から、まるまるとした二の腕を覗かせて、垂直に立てた指にはさんだタバコを忙しなげに吹かしながら、たてつづけにそんな冗談を言う。不思議なのは、その瞬間にこの掘立小屋めいたトタン囲いのような店が、それなりに然るべき一軒のバアらしいものになって感じられてくることだ。ことによると井伏さんは、名もないようなものに名前をつけることの名人なのかもしれない。——あとで述べるように私は、井伏さんの作品のなかでも昭和初期の早稲田鶴巻町界隈を舞台にしたものに、ことさらひきつけられるところがあるが、おそらくあの町も井伏さんの筆にかかるまでは、およそ文学とは縁遠い雑駁な土地だったにちがいない。そんな場所から第一級のリリシズムを掘り出してきた井伏文学の秘密は、この名附けのウマさとも関係のあることであろう。——井伏さんは、単に名

（右）小学校六年生のとき
（上）早稲田大学予科2年生のとき

もないような店に、ちゃんとした名前を呼んでそれらしい雰囲気をこしらえ上げるだけでなく、あまり坐り心地の良くないミカン箱のような椅子に腰を下ろすと、そこに落ちついたまま、しばしば明け方まで腰を据えっぱなしにしてしまわれるらしい。その晩も、私は中央線上りの最終電車に間に合うよう、時計を眺めて立ち上がった。実際そこは、そんなに長時間坐りつづけるべきところではなく、ほんの散歩の途中の腰掛けのつもりが、つい長引いただけのように思われたので、電車の音がひびいてくると、反射的に私は立って、別れの挨拶を述べた。すると井伏さんの顔が一瞬、不意に引き緊まり、きわめてソッケない口調で、

「あ、そう。君は家へ帰りますか。じゃ、僕はここでしっけい」

と、酒をみたしたガラスのコップに眼を落としたまま言われた。そのひと言で私はようやく、先輩作家を一人こんな屋台に残したまま立ち去ることのいかに無礼であるかに気が附いたが、ハッとしたときはもう遅かった。いったん浮かせた腰は再びもとの座に落ちつかせるわけに行かず、酒のこぼれそうなコップに眼を落とした井伏さんが、いったい何を考えておられるのか見当もつかぬまま、ただ自分がこの人に完全に拒否されているということを悟らされただけで、私は一目散に改札口に向かって駈け出した。



昭和14年、日向青島にて　左より、井伏、上泉秀信、岡田三郎、一人おいて、中村地平、中川一政の各氏

II

こんな些細なことが、私にはかなり後まで気にかかった。何でもないといえば、それはまったく何でもないことだ。むかしの友人で文芸雑誌の編集記者をやっているFなどから、よく「井伏さんはキビしいよ」という話はきいていたが、あの晩の井伏さんをキビしい態度だったとは言えないだろう。しかし、この際、おもて向きキビしくないということが、本当のキビしさであるかもしれなかった。すくなくとも、それは私に奇妙な淋しさを感じさせた。たとえば故郷に家のある人同士が共通の言語でささやき合っているのを、ふと耳にしたような感じだった。しかし、この奇妙な淋しさは、またある意味では私の気持を軽くもさせた。当世風の言葉で「気にしない、気にしない」という心境は、たぶんこんなものだろう。要するに私は、自分のなかにも現代の都市生活につきものの軽薄さと冷淡さがあることを、あらためてハッキリと認めさせられたわけだ。そして、そうとわかれば、いまさらそれは気にしたってはじまらないことに違いなかった。

それにしても、この井伏さんのキビしさは、半分は井伏さんのやさしさに関係のあることではないか。つまり、井伏さんの前に出ると、誰でもがかしこまってはいられなくなる。そして、つい何処かで限度を越えてしまったりするのである。これは井伏さんの文章を読んだ人には、おそら

く、察しがつくだろう。あの文章の雰囲気は井伏さんの人柄そのものであり、その印象は実際に眼の前にいる井伏さんの顔つきや言葉つきに、寸分の狂いもなく結びつくのである。私が井伏さんの作品にはじめて接したのは中学三年のころだが、井伏さんにお目にかかって言葉をかわしはじめるやいなや、たちまち私は井伏さんを中学生時代からの知り合いであるような気分に陥ち入った。

勿論こんな一人合点の錯覚は、おろかなものであり、井伏さんには迷惑なことにきまっている。しかし、そうはいっても私としては、この愚劣な錯覚は避けようのないものだった。いまでもハッキリ憶えている、あの晩、私は縁側の籐の寝椅子にひっくりかえって茶の間のラジオを聞いていた——。いまとちがって、あのころはNHKしかなかったから、どこの家でもラジオは大抵、一日中かけっぱなしにして、聞こえてくるから聞く、というようなものだったが——、茶の間では母が女中を相手に縫いものをやっており、ラジオの声は俯向いて手仕事をしている女たちの頭の上を、柱時計の振り子の音と一緒になって流れていた。そんなラジオの声が、いつの間に意味をもったコトバになって聴こえてきたかはわからない。とにかく気がつくと私は、語りかけてくる言葉に耳を傾けながら、これまでにない感動をおぼえていた。

いったい何に感動しているのか、自分にもまったくわからなかったが、物静かな口調の言葉のひと言ひと言が、まるで体に滲みこむように聴こえてきて、そのたびに微妙に自分の胸に触れてくる何かがあった。

「ある朝、氷の上に薄雪が降った……」

というあたりから、あきらかに私は昂奮しはじめた。プールの水面に氷が張って薄雪がつもり、雪の上に竹竿で大きな一匹の鯉が描かれる。と、その鯉のうしろに、鮒や目高が何匹もつきまとって泳ぎはじめる。それはもはや他から語られる言葉ではなくて、自身で張りつめた氷の上のサラサラした雪を見つめるうちに、ひとりでにそんな絵が描き上げられて行くような、新しい情感のイメージそのものになって伝わってきた。とくに、

「……けれども鮒や目高たちのいかに愚かで惨めに見えた

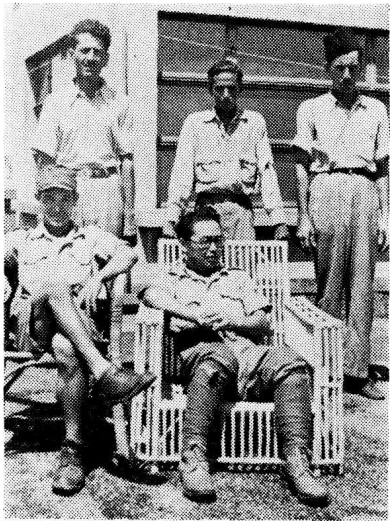
四万温泉にて　左より、太宰治、小山祐士（後ろ向き）、井伏の各氏（昭和12年ごろ）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ことか！　彼らは鱈がなかったり目や口のないものさえあった。私はすっかり満足した」

という最後の一句は、ことによると私の内部を改変してしまうほどの力があったかもしれない。

私は、このラジオで朗読された小説の題名が「鯉」であることだけはわかったが、その作者の名前も、どんな人かということも一切憶えがない。しかし、その放送をきいた後、何年間も白い雪の上に描かれた一匹の鯉の絵のイメージが心の中に残っていた。昭和十四年、ノモンハン事件のあったころ、浪人二年の受験生だった私は、前述のFと予備校で知り合い、「多甚古村」の単行本をFから借りて読んだ。



昭和17年、文士徴用で従軍　シンガポールにて（前列右井伏氏）

「イブシは、いいだろう。まるでおれたちみたいなんだ。しょっちゅう、女にふられてばかりいて」

早熟のFは、そんな口をきいた。そのとき私は、あのラジオの「鯉」も、このイブシという人の書いたものかもしれないと思ったが、それは何となくFには訊きそびれた。Fは万事につけて私よりも遙かに大人びており、学校よりも「澤東綺譚」発生の地に熱心にかよい、私のほか数人の仲間を集めて回覧雑誌をつくったり、さながら作家の卵のような生活をはじめていた。翌年、Fは三高に入って東京を去り、私は一人で三年目の浪人をつづけた。もう予備校へも行かず、家にも落ちつかず、毎日街をウロついていたが、古本屋の棚に「仕事部屋」という本を見かけ、もしやと思いながら中をひらくと、はたしてあの「鯉」が入っていた。

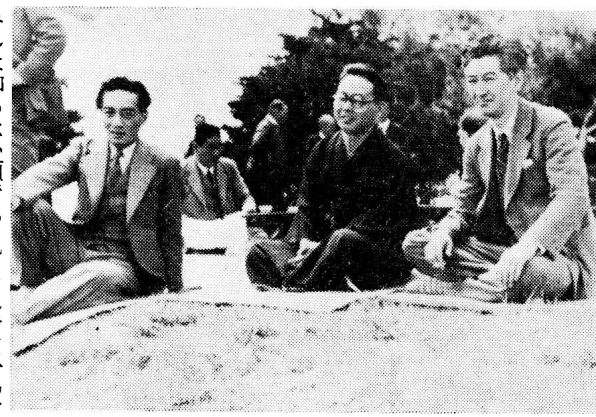
ラジオで「鯉」をきいた感動は、すでに私の記憶のなかで牧歌的になっていたが、「鯉」の作者が井伏鱒二であることを確認したことは、もっと具体的な、予感が適中したようなよろこびを私にあたえた。そしてFが、この作家を「まるでおれたちみたいだ」といったことも、「仕事部屋」に集録された作品を読んでみて、はじめてちゃんと納得することができた。そのほとんどの作品は、早稲田界隈の下宿屋、麻雀屋、喫茶店などが舞台であり、登場人物は大部分、通学せざる学生か、その延長上に暮らしている人たちで、なかには万年浪人の受験生さえ交じっていた！「鯉」

は勿論のこと、私は「仕事部屋」に収められた全部の作品を何遍繰り返して読んだかわからない。私にとって、それらは文学であるよりも、まず生活指導書、ないしは感情教育の書であり、自分に似通った生活態度の人物が文章に定着されているのをみて、心にある安定をおぼえさせられた。そしてふと自分も将来、作家になることを心がけてみようか、と思ったりしはじめた。

しかし、振りかえってみると、当時から私は何という誤解と一人合点を重ねてきたことであろう。「仕事部屋」を読んで以来、私は安定感をもって勉学を怠け、積極的に質屋へかよい、勇気をふるって悪所へもおもむくことになったが、「鯉」のモデルで井伏氏の学生時代を通じての無二の親友である青木南八氏は、教授の期待を一身に担った早大仏文切っての秀才であり、井伏氏自身も男色趣味の教授につけ狙われるという不幸に遭うまでは、勤勉で多才で、生活態度も清潔な大学生だったのである。けれども私は、なぜかそれらの事実にすこしも注意を払わず、もっぱら真似しやすい外面上の模倣に明け暮れていた。

Ⅲ

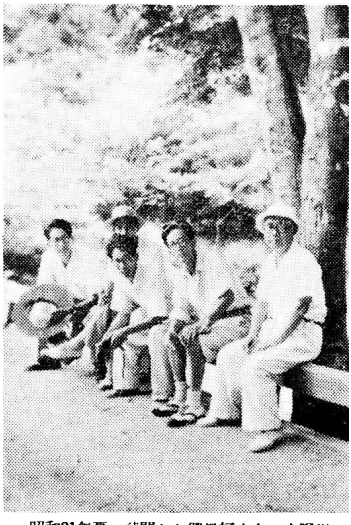
《私は大正六年八月下旬に初めて上京した。かねがね東京は誘惑が多いと田舎できいていたが、そのころ私は誘惑というのは女と親密にすることだと思っていた。それ以外には誘惑の種類を考えることができなかった。私は早く誘惑されたいと考えて電車の停留場に一時間も立っていたことがある。しかし誰も私を誘惑してくれなかった。東京の街は人通りが多すぎ、顔見知りの人間は一人もいなかった。どの人を見ても、みんな知らない顔である。それで自分の気持はこんなに淋しいのではないかと思っていた。》（「上京前後」昭和十一年）



昭和18年春、長野県塩尻峠にて　左より
日比野士朗、井伏、亀井勝一郎の各氏

これは広島県福山のゆたかな農村から出てきた十九歳の男の子の顔である。口のまわりと、アゴの下には、おそらくウブ毛のようなヒゲがまばらにのびていたであろう。中肉中背、丸顔に眼鏡をかけているが、眼鏡が顔に何となく

シックリしないのは、田舎の中学では眼鏡のようにハイカラなものをかけていると鉄拳制裁を食った、その脅えがまだ眼のまわりに残っているからである。彼は早稲田の予科の編入試験をうけて、文科へ二学期から入ったばかりだが、まだ何をやっていいのかわからない。本当は文科へ入るよりも、絵かきになりたかった。中学を出るとすぐに絵具を買ってもらい、写生しながら関西をあちこち歩き廻って、京都で橋本関雪のところへ弟子入りを志願したが断わられた。仕方がないから早稲田へ入ったが、ここは学校騒動の最中で、それを知らずに出かけて行くと、校門でつかまえられて、またもや鉄拳を浴びそうになった。中学のときは、おふくろに附きそってもらって、金持の別荘から学校へかよったが、東京では下宿へ帰っても一人ぼっちだ。それで電車の停留場に一時間もつっ立っていたが、まわりは皆見知らぬ顔ばかり……。



昭和21年夏、疎開した郷里福山在の山野川にて　右端、井伏氏、その隣、木下夕爾氏

井伏氏の文章からは、そんな途方にくれた少年の顔が浮かんでくる。読みながら私は、東京の街にあふれている地方出の大学生の一人一人が、それぞれにこんな途方にくれた想いを持っているものかと思い、一人の男の子が人並みに学校を出て、安サラリーマンなり何なり、一人前に育つまでには、まったくのところ大変な苦労がいるものだという気がする。これが私たちの国の急ピッチの都市化、とか近代化、とかいうものの裏側に横たわった大きな苦悩の正体であるかもしれない。一つ一つをとってみれば、それは極く些細な平凡な、苦悩というよりは馬鹿げた泣き言みたいなものに過ぎない。しかし皆が皆、同じ苦労をしているからこそ平凡に見えるので、明治以来の急激な変化に国中の人間が追いまわされてきた苦しみは、やはり大したものであるに違いない。

さいわいにも井伏氏は、自己の天分や才能を生かして作家になり、文化勲章その他の栄誉をうけるほどに成功した。勿論、井伏氏の作家的実力からすれば、それは当然のものであり、決して偶然の成功ではない。しかし、どの途、世間的成功は気まぐれなものであって、井伏氏自身はこれを一種の事故か災難のように思っているかもしれない。すくなくとも東京の市街電車の停留場に一時間も立ちつくしたときの井伏氏には、万一にもそんな自分の将来像は浮かばなかったであろう。常識的にみて、そのとき井伏氏はすで

に自分を世間の落伍者の一人に数えたであろう。そして、これは普通なら極く正当な判断だったはずなのである。——第一、井伏氏はこの東京で、満足に東京弁一つ話すことができなかったし、その点で俥引きにさえヒケ目を感じなければならなかった。

《私が初めて意識して東京弁をきいたのは、それ（赤ん坊のとき）から十年もたってからのことである。私のうちに強盗が来て、雨戸のそとから「明けろ、戸を明けろ」と云った。（略）母は祖父といっしょに大きな声で「おおいおおい、みんな来てくれえ！」と叫んだ。それでも強盗は「戸を明けろ！」と云った。祖父が「この深夜、何の用か！」と詰問すると、強盗は「文句を云わねえで明けろ！」と云った。》（「鶏肋集」昭和十一年）

私が読むと、これは強盗にしてはじつに礼儀正しい（あるいは、よほど不精な）男で、中から戸を明けてくれるのを待ってドナリつづけていたのは案外、ただの酔漢ではなかったろうかと思われるくらいだが、重要なのは井伏氏がこの経験から、東京弁を盗賊用語だと認識したことだ。そしてサイコロジカルな意味では、この認識はじつに正鵠を射たものと言えるのである。——まさに東京とは、人びとが強盗の言葉で話す都会であり、それを知らないのは、当の強盗語でしゃべっている人たちだけであるに違いない。

このような都会の、街頭の雑踏に立ちつくして、なおそのうえに自分から「誘惑」されることを待ちのぞんでいるとは、何と気の好い少年であろう。しかし当の井伏氏にすれば、このときは、こうしているより仕方がなかった。本当なら一刻も早く福山の家に逃げ帰り、そこでノンビリと庭の木や、池の金魚の絵でも描いてくらしたいところだったろう。しかし、その家には家督を嗣ぐ兄がいる。自分一人ぐらい入れてくれる余裕はあるにしても、一生をそのようにしてすごすことは許されない。長男が家を嗣ぎ、次男以下は外へ出るのが、生まれたときからの宿命である。次男以下は財産の分与をうける代りに「教育」をさずけられる。そして漱石流にいえば、頭につめこまれた「学歴」というちっぽけな資本をたよりに、強盗の言葉でいっぱい

釜無川上流でヤマメ釣り　（昭和39年）

になった都会の真中に放りこまれる。そうである以上、勇を鼓して、まず「誘惑」志願にでも立つほかはないわけだ。

ところで井伏氏が、文学よりも絵が好きだったというのは、その作品の傾向からみてもウナずける。「風貌・姿勢」その他、スケッチ風の人物論の無類のうまさや、魚や鳥や生きものの描写の的確さ、豊かさ、をみても井伏氏に写生の才能があることはすぐわかる。とくに初期の短篇は、絵を文字でつづったものだとも言えるぐらいだ。少年時代に、池のそばでカンバスを据えて油絵をかく人を見たとき、チューブから絵具を絞り出すのに唖然となり、青と黄をまぜて緑を生み出すのをみて、まるで神業のように感心させられたということだが、色彩に対するこうした敏感さは生まれつきのもので、井伏氏の家系の素質でもあろう。

幼時に父と死別した井伏氏は、祖父の庇護の下に可愛がられて育ったが、この祖父が応挙、一蝶、竹田、その他、多くの書画骨董をあつめて、そのコレクションを誇っていたのも、井伏氏の感性を育てたことであろう。——もっとも井伏家の蒐集品は応挙以下すべてニセ物ばかりであったことが判明した、と井伏氏の随筆にはあるが、祖父君がそれらを愛蔵したことは間違いないし、井伏氏の実兄も、亡父も、芸術に対する志向があった。とくに亡父には文才があり、療養中にこころみた漢詩の翻訳のいくつかがノートに残されている。

題袁氏別業　　賀知章

主人不相識　　主人ハダレト名ハ知ラネドモ
偶坐為材泉　　庭ガミタサニチョトコシカケタ
莫謾愁沾酒　　サケヲ買ウトテオ世話ハムヨウ
囊中自有銭　　ワシガサイフニゼニガアル

この訳文には井伏氏の手が入っているというが、それにしても井伏氏の資質が、この幼時に死に別れた父君の遺伝をうけていることは大いに有り得るだろう。

しかし井伏氏が文学よりも絵を好んだというのは、何よりも絵が手にとって見られるモノだからでもあるだろう。百姓が自分の収穫を掌に受けて眺めるように、仕事や作業の成果は一個の現物でないと気がすまないという、いわば即物的なリアリズムが井伏氏の資質の根本にありそうな気がする。自分の眼で見てたしかめたものだけしか信じないという現物主義が、井伏氏の心底には多分よほど頑固に根を張っている。——これもF君にきいた話だが、皇居前広場のメーデー事件のあったとき、デモの騒ぎを現場でみてきたFが、昂奮してその模様を井伏さんの家へ行って話したところ、黙って話をきいていた井伏さんは突然、顔を上げると、「そのときのデモ隊の持っていた赤旗は何ですか？　たとえば旗の生地は絹ですか、木綿ですか、それと

もナイロンか何かですか」と訊かれた由である。

これには無論、井伏氏一流の意識したポーズが感じられる。しかしデモ隊の赤旗の生地に眼をつけるのは、やはりポーズだけのものではない。

「黒い雨」で広島の原爆被爆のありさまを描写するとき、火に迫われて市民が逃げて通った道路のことを井伏氏は綿密にしらべられたという。当時の広島市内の地図をとりよせ、道路の幅をいちいち計ったという話を、担当記者のS氏からきいた。しかも「黒い雨」のなかには、そのころの広島市の道路幅のことなど一行も出てこないのである。つまり井伏氏の調査の目的は、小説の記述に数字上の正確を期することではなく、調査することで頭のなかに場景のイメージをかためることである。これは井伏氏にかぎらず、小説家が調査するときの態度は一般にこういうものであろう。それにしても、道路の幅から、そこを逃げて行く人間の表情なり苦痛なりを想像して行くという方法は、いかにも井伏氏らしいやり方ではないか。

こういう井伏氏は、観念や概念だけから小説を書いたりは絶対にしない。といって所謂早稲田自然主義といわれる一派にも属さない。なぜなら自然主義のとなえる写実は、それ自体がすでに一個のイデオロギーだからであろう。観念論のきらいな井伏氏の口からは別段、反自然主義文学論もきいたことはないが、氏の作品や、文壇的な交友からみても、そう判断して差しつかえないだろう。

自宅にて　（昭和33年7月）

井伏氏が新進作家として登場した昭和初年は、左翼文学の最盛期であり、氏の所属した同人誌「世紀」、「陣痛時代」の同人も、井伏氏を除いて全員が左翼運動に参加した。また太宰治からも執拗な説得をうけた一時期があったが、井伏氏はついにまったく左傾することがなかった。これについて氏自身は、「主として気無精によるもの」と称しているが、これまた氏一流の韜晦であって、本当は社会主義の説く未来像など、てんから信用する気がなかったはずである。

では井伏氏が何をやったかといえば、それは言葉を、つまり文章を徹底的に磨き上げることである。氏にとって東京弁は強盗弁であったが、東京で暮らして行くには、その強盗言葉をマスターすることが先決であった。氏自身には

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com